

# 名古屋 文化情報

2013  
11・12  
November / December

No. 353  
NAGOYA  
Cultural  
Information

随想／中田裕子（俳優） 視点／名古屋のアマチュアオーケストラ  
この人と／藤田六郎兵衛（能楽笛方） いとしのサブカル／伏木 啓（映像作家）



2013

11・12

November / December

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2

随想 重い想いを思うこと… 中田裕子(俳優)…… 3

視点 名古屋のアマチュアオーケストラの華々しい活躍を追う… 4

この人と…  
藤田六郎兵衛(能楽笛方藤田流十一世宗家) …………… 6

ピックアップ…………… 10

いとしのサブカル 伏木 啓…………… 11

おしらせ…………… 12

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知外子 (オクダ モダン ダンスクラスター副代表)
- 酒井晶代 (愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)
- 田中由紀子 (美術批評/ライター)
- はせひろいち (劇作家・演出家)
- 米田真理 (朝日大学経営学部准教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

表紙

作品

「展開する風景  
ニューヨーク マンハッタン島  
2012年2月26日」

(2012年/インクジェット・プリント/4,700×1,830 mm)  
この写真は1000枚近い写真画像を合成して制作しました。画面上のあらゆるところに中心がある、極めて絵画的なパースペクティブを持った作品です。また、撮影者の視点の移動に伴う時間の記録という意味でも、瞬時の記録である写真とは異なり、絵画に近い作品と言えるでしょう。

小林 亮介(こばやし りょうすけ)

1955年 神戸市に生まれる  
1986年 東京藝術大学大学院博士後期課程単位取得後退学  
1986～1990年 ドイツ、デュッセルドルフ芸術アカデミー留学  
現在 名古屋造形大学 コンテンポラリーアートコース教授 学長

「二〇一二年 名古屋市民文芸祭」  
〔第六三回名古屋短詩型文学祭〕小・中学生の部  
詩の部 市長賞受賞作品

※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆

名古屋市立有松中学校二年

岩崎涼花

バンソウコウは涙

ガラスが割れてしまったら  
ボンドでくっつけたい。  
紙が破れてしまったら  
テープで貼り直せばいい。  
転んでけがをしたのなら  
バンソウコウを貼ればいい。  
バンソウコウを貼って、  
傷が治ったら剥がすんだ。  
繰り返し  
繰り返し  
治った傷は  
心の底へ移動する。  
― 要らないよ、もう  
どうせ剥がれちゃうんでしょ？  
永遠にはがれない  
バンソウコウをください。

## 随想

## 重い想いを思うこと



なかた ゆうこ  
中田 裕子(俳優)

俳優。昨年まで総合劇集団俳優館に所属し、ミュージカル、金子みすゞを描いたひとり芝居、「どん底」「宮城野」など様々な舞台に出演。外部出演も多く、2012年松原英治・若尾正也記念演劇賞を「三人姉妹」(俳優館)と「昔の女」(七ツ寺プロデュース)の演技にて受賞。

過日、名古屋市文化振興事業団設立 30 周年記念事業、名古屋の演劇人が贈る名作劇場「國語元年」(9月14日～16日、東文化小劇場)の公演がありました。ありがたいことに、私も出演者の一人としてその舞台に立たせてもらいました。この「國語元年」とは、言わずと知れた井上ひささんの書かれた戯曲で、明治初期、“全国統一話し言葉”の制定を命じられた官僚が、様々なお国訛りを話す家族や奉公人、居候たちと共に粉骨砕身するお話です。井上さんが描くこのドラマは、権力に振り回される心やさしき人々への愛に溢れています。

物語の終盤、私の演じる加津という女中頭が、会津出身の元武士の手紙を読むシーンがあります。「……万人の使用する言葉を、個人の力で改革せんとするはもともと不可能事にて候わずや。万人のものは万人の力を集めて改革するが最良の上策にて候わずや。そのためには一人一人が、己が言葉の質をいささかでも高めて行く他、手段は一切あるまじと思ひ居り候。己が言葉の質をいささかでも高めたる日本人が千人寄り、万人集えば、やがてそこに理想の全国統一話し言葉が自然に誕生するは理の当然に御座候。……」この台詞を

お客様の前で口にした時、身体の内から震えがきました。すでに3年前に亡くなられ、もう何も書くことも、語ることも、訴えることもできない井上ひささんの、「言葉」への、「個人の尊重」への、「ユートピア」への強い想いを、私が代わって伝えていることへの責任や使命といったものに身震いましたのです。

私は幸い身体も丈夫で、応援してくれる家族や、素敵な方々との出会いを重ね、とても恵まれた環境でお芝居を続けてこられました。でも世の中には、命を奪われたり、身体が不自由になったり、自分の意思ではどうにもならない理由で、何かを続けたくても続けられなくなった人がたくさんいます。井上ひささんもそうだと思います。東北出身の井上さんのことですから、もし、ご存命でおられたなら、東日本大震災の経験は、きっと井上さんの書く、語る、訴える意欲や意志が込められた作品に昇華したに違いありません。だから私は、私のできることを全うしなければならない、真摯にお芝居に取り組まなければならない……! 元来なまけ者ですから、こういう機会にちゃんと心に刻みつけなくちゃと思う2013年秋です。

# 名古屋のアマチュアオーケストラの華々しい活躍を追う

近年、アマチュアオーケストラの活動が熱い。全国的にも演奏が稀な大曲に挑み、高いレベルの演奏を披露している。楽団単独での演奏会にとどまらず、他団体や合唱との共演など活動の幅を広げている。近状についてまとめてみた  
(まとめ／渡邊 康)

## 大型企画の成功

「名古屋マーラー音楽祭」が2011年から2012年にかけて全11回が開催された。これは名古屋を中心に活動するアマチュアオーケストラが結集して成し遂げた大型企画で、2011年は8月を除いて1月から12月まで毎月、交響曲の番号順に演奏するというものであった。そして特に大規模な交響曲8番「千人の交響曲」は2012年7月に指揮者の井上道義氏を招いて、愛知県合唱連盟のメンバーも加わっての大演奏会となった。この壮大な試みは、世界的にも稀なマーラーの全曲演奏会ということで、名古屋に限らず広く注目された。

また今年の8月25日にはワーグナーの大作、舞台神聖祝祭劇「パルジファル」を、アマチュアオーケストラからなるワーグナープロジェクト名古屋管弦楽団とモーツァルト200合唱団が、4時間にもおよぶ熱演を繰り広げた。三澤洋史氏の指揮によるオーケストラは100人近い大規模なものであった。

日本でのマーラー全曲演奏は、来日したジュゼッペ・シノーポリとフィルハーモニア管弦楽団による1990年の演奏を除くと日本での演奏、特に日本人による演奏となるとほとんど例がないことだし、アマチュアオーケストラによるものとしては世界初である。「パルジファル」の全曲演奏も同様である。それが名古屋のアマチュア音楽家の手で成し遂げられたことは快挙と言うしかないものだ。

マーラーの交響曲演奏ではオーケストラだけではなく大きな編成の合唱団が必要である。少年少女合唱団さえも必要となるので、このことも演奏が困難な要因となっている。さらにこれらの曲を演奏するには楽器演奏の高度な技術が求められる。プロの奏者でもかなり困難といわれるこれらの曲を、連続して演奏するとなるとさらにハードルが高くなる。そこでアマチュア団体が結集して交替で演奏するということになるのだが、マーラーの演奏が可能な技術水準の高い

アマチュアオーケストラ10団体を集結することは容易なことではない。さらには合唱団にも専門家の技量が必要になるのである。

## 教育現場での活動

名古屋のアマチュア音楽家のレベルの高さを証明したともいえるこの演奏には、名古屋のそして東海地方の音楽教育の盛んな実態が基盤となっていると考えられる。その中心となっているのが中・高での部活動としての音楽活動であるが、その活動の中心は合唱部ということになる。しかし楽器を使った器楽合奏の分野もかなり盛んで、吹奏楽とオーケストラ(管弦楽)がそれにあたる。

吹奏楽とオーケストラは両方とも複数の楽器による大型の合奏団である。しかし両者は楽器の種類、数、そして演奏する曲の種類がかなり異なっている。吹奏楽は使用する楽器が息を直接吹き込む管楽器であるのに対して、オーケストラではヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの弦楽器がその中心。弓で弦を擦って音を出すおなじみの楽器がオーケストラの半数以上を占める。一方オーケストラの中での管楽器奏者は少数派で多くても20人弱である。演奏する曲もオーケストラは、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームス、ドヴォルザークなどのいわゆるクラシックの名曲であり、吹奏楽は吹奏楽のために書かれた現代曲、マーチやポピュラーミュージック



愛知工業大学名電高等学校吹奏楽部



千人の交響曲

ツクの編曲といった新しい時代の曲がほとんどである。

生徒、学生にとっては練習する曲の親しみやすさもあり、弦楽器の技術習得には時間がかかり、また楽器もよりデリケートで管理が難しいこともあって、学校現場での楽器の導入にあっては管楽器が中心になるのは自然の流れであった。そして大学・一般社会人にまでその広がり大きく、日本の吹奏楽人口は 100 万人を超えるといわれている。全日本吹奏楽コンクールを核とした全日本吹奏楽連盟の組織も充実しており、2012 年の加盟は 14,255 団体にのぼる。名古屋を中心とする地域では愛知工業大学名電高等学校、光ヶ丘女子高等学校、安城学園高等学校、愛知県立名古屋南高等学校の全国的な活躍が目立っている。

一方のオーケストラ活動だが、その全国的な組織化は吹奏楽ほどではなく、全国規模のコンクールも存在していない。しかし徐々に集結して 1972 年に豊橋市に集まった 23 団体で始まった日本アマチュアオーケストラ連盟の 2010 年の加盟団体数は 141 団体である。この全国組織が豊橋からスタートしたことはやはり日本のオーケストラ活動の核がこの地区にあるという点で注目されるだろう。また名古屋地区に限ったことではないが、様々な形態のオーケストラが存在するために、その数を特定するのは困難であるのだが、演奏会を行うアマチュアオーケストラは 1,000 を超えるという説がある。中・高にオーケストラ部があるのは珍しいが一定規模以上の大学にはオーケストラ部がおおむね存在する。また社会人オーケストラの数と量は増大している状態といえるだろう。吹奏楽活動と比較すると数は桁違いに少ないが、その深みはかなり増しているといえる。

## さらなる盛り上がり

「名古屋マーラー音楽祭」の開催は、オストメール・フィルハーモニーのコンサートマスターを務める高橋広氏のマーラー作品への熱い想いが音楽仲間に伝わり、高橋氏が核となってこの大きなうねりが生じたのだ。高橋氏は東海学園交響楽団 OB で顧問の西村尚登氏と共にこの企画を発案し、実現のために西村氏を理事長とする NPO 法人名古屋音楽の友を設立。そして名古屋マーラー音楽祭運営委員

会を立ち上げ、音楽評論家の藤井知昭氏を委員長に、名古屋市文化振興事業団、愛知県文化振興事業団、日本アマチュアオーケストラ連盟、名古屋商工会議所、愛知県合唱連盟、そして地元の多くの企業の賛同を得るに至った。

そうして名古屋のアマチュアオーケストラの関係者に熱く働きかけ、近郊の長久手フィルハーモニー管弦楽団、伊勢管弦楽団の参加も得た。そして運営の核となる実行委員会は、参加オーケストラの中心のベテランメンバーが集い、大いに盛り上がりを見せたということである。

このような大型企画には計り知れない膨大な労力を要する。多くの音楽仲間がオーケストラ活動への情熱で力を出し合い成し遂げたのは、こうした名古屋の地とその文化が培った大きな成果だった。愛知県合唱連盟（長谷順二理事長）の賛同を得てその加盟団体が高いレベルの合唱で力を合わせたのも、この地方ならではの光景である。

8月のワーグナープロジェクト名古屋管弦楽団とモーツァルト 200 合唱団による「パルジファル」公演もこの大きなエネルギーの流れによるものであった。この流れはさらに勢いを増してこの先ウィーンでの公演が企画されてもいる。

アマチュアオーケストラは演奏会に向け長い時間をかけて練習する。そのため想いのこもった熱い演奏が繰り広げられる。ひたむきな情熱が音楽に表れるのはすばらしい。この名古屋の地に着実な足跡を残し、さらに前進するアマチュア音楽家の様子は、名古屋の文化を照らす大きな光となっている。誠に頼もしい。

# この人と...



能楽笛方藤田流十一世宗家

## ふじ た ろく ろ びょう え 藤田六郎兵衛さん

### “舞台作り”の軌跡

藤田六郎兵衛氏は、つねに能楽の世界に新しい話題を提供してくれる。平成21年には、囃子方に焦点を当てた「萬歳楽座」を立ち上げ、同会は23年、第66回文化庁芸術祭大賞(演劇部門)を受賞。昨年2月にはワルシャワで新作能「ショパン」、本年3月にはニューヨーク・グッゲンハイム美術館で野村萬斎氏と「三番叟」を上演するなど、活躍は実に多彩である。

その背景には、能楽師のみならず、舞台の演出家の顔が窺われる。今回のインタビューでは、そうした“舞台の作り手”としての藤田氏のルーツに迫ってみた。(聞き手:米田真理)

### 先見の明があった先代

藤田氏は昭和28年、十世宗家の孫として生まれ、芸嗣子となった。5歳で初舞台をつとめて以来、例えば10歳で「鷺乱」、15歳で「翁」と、重い曲を異例の若さで披露、宗家を継承する者としての道を着実に歩んできた。

当然、その稽古は厳しく、うまくできて当たり前という姿

勢を先代からたたき込まれた。

さて、その先代は、藤田氏の高校入学に際して西洋音楽の勉強をするよう勧めた。笛方としての活動に幅が出るよう、将来を見通してのことだった。

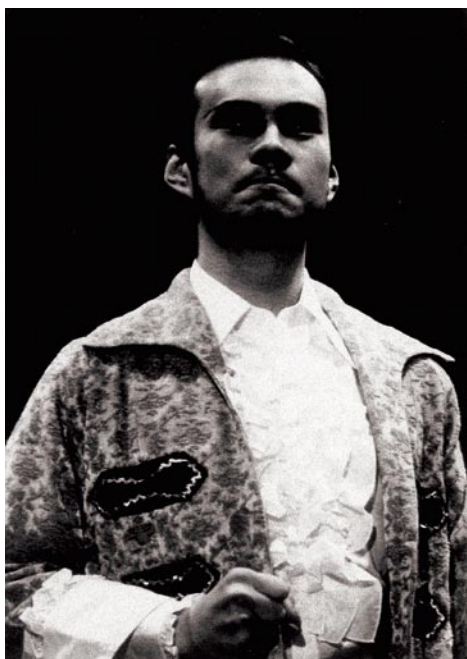
そうした、先代の先見の明について、藤田氏はこう話す。「何か新しいことをしようとするとき、いつも、先代が私の背中を押してくれる気がします。先代の、明治生まれならではの強さを、折々に受け取っていると感じます」。

そして、先代と親交のあった横井園生氏(指揮者・名古屋音楽大学名誉教授)にソルフェージュを習い、同朋学園高校音楽科に入学、さらに名古屋音楽短期大学声楽科に入学した。専攻科を卒業後は、母校のオペラ研究授業の助手として勤務しながら、プロになるための素養を培った。

能の笛の厳しい修行と並行して、西洋音楽の勉強をする日々は、忙しくも楽しかった。昭和55年、藤田氏が27歳のときに先代が急逝。藤田流宗家としての活動がスタートしたため、助手生活は5年間で終わってしまったが、その頃の活動が、藤田氏のその後の活躍の原動力となった。



昭和34年1月吹初式



オペラ「フィガロの結婚」の伯爵役

## ミュージカルとの出会い

宗家を継承して間もなく、新しい出会いがあった。木崎裕次氏(演劇人冒険舎元代表・現顧問)の声かけにより、中村哮夫氏演出のミュージカル「ザ・ファンタスティックス」のオーディションを受け、主役エル・ガヨ役での出演が決まったのだ。

藤田氏にとって、ミュージカルの世界は、何もかもが新鮮だった。それまで勉強していた能やオペラには、定まった台本があり、動作にも「型」がある。一方、ミュージカルの台詞はいわば生のもので、何度も出演者が揃って稽古を行ううちに、演出が変わっていく。そもそも、能では本番までに全員が集まって舞台調整するのは申し合わせ(リハーサル)の



「ザ・ファンタスティックス」

一回だけだから、そのこと自体大きく違うのだ。

稽古の方法についても、能やオペラでは師匠の演奏や演技を写すことから始め、反復して稽古をするが、ミュージカルの演出家は「こんな感じで」というイメージから入ってくる。演技を自分のものにしようと、東京で能の舞台がある機会を見つけては、中村氏を訪ね、稽古を受けた。

「ミュージカルの経験を通して得たのは、どうしたら観客に楽しんでもらえるか、という視点でした。照明や音響の効果について学ぶ機会にもなりましたし、本番中も、観客の反応を意識しながら演じるのが、本当に楽しかった。能の笛方としては得がたい体験でした」。そして、この経験が今後の舞台作りに活かされていくのである。

## 初めて能の舞台を作る

藤田氏が初めて舞台を“作った”のは、昭和60年2月、「四次元パフォーマンス・能」と銘打った能《隅田川》である。「名古屋市青少年のための芸術劇場」の一環だった。

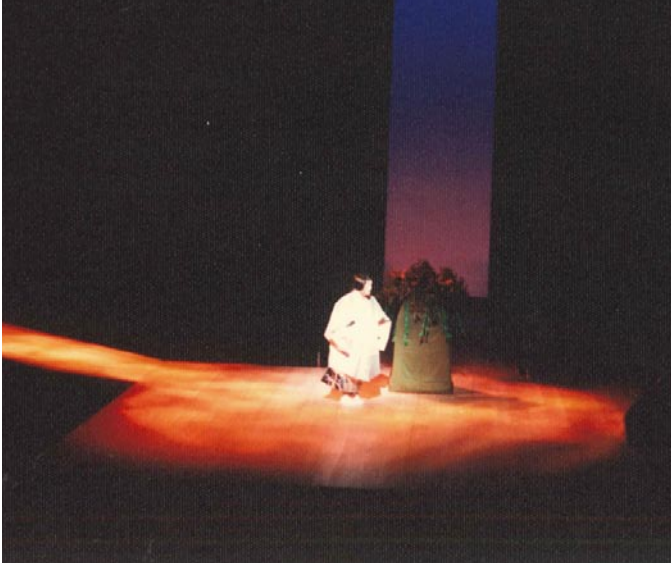
この公演の最大の特徴は、会場が、できたての名古屋市芸術創造センター(以下“芸創センター”)だったことだ。「それまで、青少年のための能の公演が行われていたのは熱田神宮能楽殿でしたが、能や狂言に触れたことがない若者には、足を運んでもらえそうにありませんでした。それで、能と狂言はシリーズ公演から外されそうにさえなっていたのです。そこで、開館初年度なので話題性に富んでいる“芸創センター”を使うことになりました。しかし、能舞台以外で能や狂言をどう演じたらよいか、ずいぶん迷いました」。

ところが、ここでまた素敵な出会いがあった。行きつけだったバーのマスターの仲介で、当時CBCの美術担当だった島崎隆氏から、貴重な助言をもらうことができたのだ。

そして、特殊な形状の舞台が実現した。

「横長の舞台の真ん中に、正方形の能舞台を設けたのです。また、ふつうは客席から向かって左側に延びている“橋はしがかり”(楽屋と本舞台とをつなぐ通路)を、大胆にも三方に付けました。照明も工夫し、能舞台上演するのは趣の異なる能《隅田川》ができあがったのです」。

直前に名古屋市芸術奨励賞を受賞したばかりの若き家元が新演出で行う能、という前評判が新聞に取り上げられ、当日は、超満員の観客を迎えることができた。藤田氏にとって初めてのプロデュースは、大成功をおさめたのである。



芸創センターでの隅田川

### 能のファンを増やすためのチャレンジ

“芸創センター”での成功を通して、藤田氏は、能を多くの人に観てもらうために必要な条件について、ある確信を得たという。それは、会場の立地がよいこと、低料金であること、さらに、演出の工夫等の話題や情報が事前に行き渡っていることである。そして、それが100%の確信になったのが、同年の「セントラルパーク薪能」だった。

テレビ塔の足下に、地下街から地上の公園への吹き抜けがある。そこで、セントラルパーク7周年を記念して薪能を催す企画があり、藤田氏が演出を行ったのだ。照明や音響による演出は通りがかりの人の目を引き、次々と人が集まってきた。若者たちがその場に座り込んで能を観ている光景こそ、藤田氏にとって、待ち望んだものだった。

翌年から始まった「名古屋城夏祭り」の薪能も、同様の試みにより、それまで能や狂言に触れたことのない多くの人に、直に舞台を観てもらう機会となった。

こうしたプロデュース活動は、決して奇をてらうことが目的ではないと、藤田氏は力説する。「子どもの頃から能の舞台に出演していて、見所(客席)はいつも同じ顔ぶれだという印象がありました。謡や仕舞などのお稽古をしている方が主なお客様なのだから、当然です。もちろんそういう方々を大切にしながら、同時に、新しい客層、能や狂言のファンを増やしたいと思い続けてきました。そのためには、上演前の情報提供や、お客様に興味を持っていただくための工夫が必要だということを、今も大切に考えています」。

### 能楽の外側へ、そして内側へ

藤田氏にとって、30代から40代は、新しい分野の仕事に次々と取り組んだ時期だった。そうした仕事を通して、「自分の身体の中に様々なものが入ってくることを、常に実感していた」という。

毎日新聞で週一回、随想を連載していたときは、能楽について専門的に語るにとどまらず、建築や美術など様々な分野の本を読み、持論を述べるというスタイルに挑んだ。

また、中京テレビでは、週一回の対談番組で司会を担当した。経済界などの著名人の自宅を訪ね、趣味を聞くという企画で、文化を通じた彼らの意外な人脈にいつも驚かされた。

こうした仕事は、藤田氏自身の多方面にわたる好奇心があってこそ実現したものだった。と同時に、藤田氏の専門である能楽について、様々な角度から見直す契機にもなった。

例えば、市民向けに能を紹介する企画にも、藤田氏ならではの工夫が加えられた。千種社会教育センター(現千種生涯学習センター)での連続講座は、毎回、藤田氏自身が司会となって、能のシテ方をはじめワキ方、狂言方、囃子方たちをゲストに招き、対談形式で講義するという方式をとった。この新しい試みは開催前に新聞で紹介され、初回から超満



セントラル愛知交響楽団と共演



員。大きな反響を呼んだ。

このように、いわば時代の寵児と言うべき活躍ぶりを見せてきた藤田氏だが、その根本にあったのは、より多くの人に能楽に興味を持ってもらいたいという願いだっただけ。つまり、自身がメディアに取り上げられれば、同時に能も紹介され、多くの方が能に関心を持ってくれる。外の世界に目を向けることが、ゆくゆくは、伝統的な能の存続を支えていくという、家元ならではの大きなビジョンに基づいているのである。

## 藤田流のルーツ、尾張名古屋への思い

日本全国はもちろん、海外公演など国際的な舞台でも活躍する藤田氏だが、近年では特に、自身の原点である藤田家と、それを支えてきた尾張藩や名古屋の歴史に思いをはせることが多くなったという。

笛方藤田流のルーツは、400年前に遡る。但馬国出石の侍の家に生まれた少年が、一途に笛に耽溺し、13歳で母方の叔父（臨濟宗の高僧として有名な沢庵和尚）に連れられ和泉国堺に出、京都では後の関白・近衛信尋に仕官。その笛の技量を見込まれ、尾張藩主に望まれて名古屋に移った。藤田流初代家元、清兵衛重政である。いま藤田氏の住まいであり、流儀の本拠地である藤田舞台は、藩から賜った屋敷の地をそのまま受け継ぐものである。

尾張藩のお抱えとなった藤田流だが、その笛の音色は城の中だけのものではなく、町の人々の暮らしの中にも広がり、生き続けることになった。東照宮や若宮の山車祭で演奏される祭囃子の笛である。

「祭囃子の中に藤田流の笛が生きているのを聞くと、ほんとうに嬉しくなります。残して下さってありがとう、という気持ちになります」。藤田氏の先代も、若い頃、酒に酔った勢いで東照宮祭の山車に登って笛を吹き、そのまた先代に怒られたと、笑顔で話していたという。藤田氏にとって、祭囃子には格別な思いがあるのだ。

そんな藤田氏と、山車祭の囃子との共演が、この秋開催される「やっとかめ文化祭」で実現する。西枇杷島東六軒町泰亨車保存会と、若宮八幡社福祿寿車山車保存会による演奏に加え、藤田氏自ら祭囃子の系譜につながる笛の秘曲を演奏する。

ともに400年もの歴史を有する藤田流と祭囃子のつながりを実感できそうな、楽しみな催しである。



藤田舞台にて

## まとめ

藤田氏の活動は、多岐にわたって広がりながら、その核として常に、400年の藤田流の歴史と、それよりもさらに長い能楽の歴史とが意識されている。能楽の外側の世界と内側、新しい能と伝統的な能、海外公演など国際的な活躍と尾張藩の能というふうには、双方向でつながっているのだ。だからこそ、氏の活動を通して生まれた新しいファンは、自然に伝統的な能楽、特に、名古屋の能楽を愛好するファンに変わっていきけるのだろう。

実は、インタビューの中で、何度か「もう還暦ですから」という言葉が聞かれた。だが、藤田氏の熱い語り口を拝聴していると、これからもいっそう、氏ならではの楽しい企画が生まれてくることを確信できた。

催物案内

## やっとかめ文化祭

四百年の時をつなぐ  
十一世藤田六郎兵衛 笛の世界

日 時：2013年11月4日(月・休) 14:00開演  
会 場：名古屋能楽堂  
料 金：指定席4,000円 完売  
自由席 一般3,500円 学生2,000円  
問い合わせ：名古屋市文化振興事業団 TEL052-249-9387

## 名古屋能楽堂企画展

能楽笛方藤田流宗家 藤田家伝来名品展

日 時：2013年11月4日(月・休)～17日(日) 9:00～17:00(最終日は16:00まで) **入場無料**  
会 場：名古屋能楽堂展示室

# ピックアップ

## 公演案内

プロとつくる舞台～ホップ・ステップ・ジャンプ～  
風のともし火～「ごんぎつね」より～

日 時：2014年1月18日(土) 14:00開演

会 場：芸術創造センター

台 本：佃典彦

構成・演出：西尾栄儀

料 金：1,000円(全自由席)

※問い合わせは名古屋市文化振興事業団 TEL052-249-9387

## 「ごんぎつね」が朗読劇に

本誌の発行元である名古屋市文化振興事業団は、2005(平成17)年度から毎年、市民参加型の朗読劇「みんなのリーディング」を企画・実施してきた。今年度からこのリーディングがさらにパワーアップする。3年間の長期的な企画であること、公募で選ばれた30名がプロの劇団員と共に舞台に立つこと、そして3回とも同じ題材を用いて劇作家がそれぞれ新作台本を書き下ろすこと、どの点からも「プロとつくる舞台～ホップ・ステップ・ジャンプ～」という企画名どおり、スケールの大きい魅力的な事業になるはずだ。

題材として選ばれたのは、今年7月に生誕100年を迎えた童話作家・新美南吉の「ごんぎつね」。初出は1932(昭和7)年1月号の『赤い鳥』で南吉18歳の時の作品だが、戦後は小学校の国語教科書で広く親しまれ、現在では南吉の代表作のひとつに数えられる。いたずらの償いをしようとした小狐「ごん」が、すれちがいや誤解の末に火縄銃で撃たれ息絶えてゆく哀しい結末を記憶している方も多いのではないだろうか。1年目の今回はこの作品をもとに、劇団B級遊撃隊を主宰する劇作家・佃典彦さんがオリジナル台本を執筆する。9月に台本執筆中の佃さんから伺ったお話では、南吉の原作を生かしつつそこに現代の小学



オーディション風景

生と祖父の物語を加えることで、複数の物語が響きあうような構成を考えておられるようだ。30名の朗読と役者による演技という配役について「児童演劇の台本は数多く書いてきましたが、こうした組み合わせは初めて。制約も含めて楽しみながら書いています」と語ってくれた。オーディションには10代から70代まで116名の応募があり、構成・演出を担当する劇団うりんこの西尾栄儀さんが審査にあられた。「舞台をみんなで創り上げる面白さを味わってほしい」という審査後の西尾さんの言葉が強く心に残った。

南吉作品の底流に「生存所属を異にするもの同士の、流通共鳴」とのテーマを見出したのは、同じ『赤い鳥』誌出身の作家・与田準一であった(『新美南吉童話全集(第1巻)』解説、大日本図書、1960年)。国語科教育の立場から「ごんぎつね」を研究している府川源一郎もまた、「人と人のかかわりの問題とその亀裂を見つめ続けた作家」と南吉を評価する(『「ごんぎつね」をめぐる謎』教育出版、2000年)。現代の意匠をまとうことで原作が新たな輝きを放つとともに、その生命にふたたびスポットがあたる、そうした舞台になるだろう。

(M)



平成24年度「KANOKO」

### 「なごや文化情報」に関するアンケートのお願い

右記の質問にご回答いただき、FAX または郵送にて**11月25日(月)【必着】**までにご返信ください。ご回答いただいた方の中から**抽選で20名様に図書カード500円分をプレゼント**いたします。

※当選の発表は景品の発送をもって代えさせていただきます。お預りした個人情報につきましては、当該アンケートの事務連絡のみに使用させていただきます。

「なごや文化情報」は今年度から隔月刊(偶数月発行)となり、誌面を全ページカラーに一新しました。また、「今月のうた」は「名古屋市民文芸祭受賞作品」の紹介コーナーに変更し小中学生の作品を取り上げ、サブカルチャーについての新コーナー「いとしのサブカル」をスタートしました。

- 内容について、どう思われますか。  
①よい ②まあよい ③あまりよくない ④よくない
- 「なごや文化情報」の中で関心を持つ記事はなんですか。(複数回答可)  
①表紙 ②名古屋市民文芸祭受賞作品 ③随想 ④視点 ⑤この人と  
⑥ピックアップ ⑦いとしのサブカル ⑧1年をふりかえって(3・4月号掲載予定)
- 今まで「なごや文化情報」をお読みになって感じたことをご記入ください。
- 今後「なごや文化情報」で取り上げてほしい話題や、コーナーがありましたら、ご記入ください。
- ご回答いただいた方の①お名前 ②性別 ③年代(30代など) ④郵便番号 ⑤ご住所 ⑥電話番号

【宛て先】〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 ナディアパーク8階  
(公財)名古屋市文化振興事業団・文化情報アンケート係  
FAX: (052) 249-9386

# いとしの サブカル

## ゆるりと大須を歩きながら サブカルチャーと アートに思いを巡らし

伏木 啓 (ふしき けい)

映像作家。名古屋学芸大学メディア造形学部専任講師。ドイツ・バウハウス大学MFA課程修了。時間意識における線形性と非線形性の重なりを主題とした映像作品や、インスタレーション／パフォーマンス作品を制作し、国内外で発表している。

いつ行っても大須は不思議な街である。電子パーツや音響機器の専門店、ゲームやアニメショップ、メイド喫茶など、確かに秋葉原(東京)や日本橋(大阪)に似たものはあるが、アーケードに包まれた商店街には古くからの飲食店、古書店、銭湯などが軒を列ね、また古着ショップや雑貨屋など若者向けのお店も数多くある。東京でいえば、浅草と下北沢、そして秋葉原を混ぜ合わせたような変な場所なのだ。そのような界限にて、時折足を運ぶのが『セツ寺共同スタジオ』である。

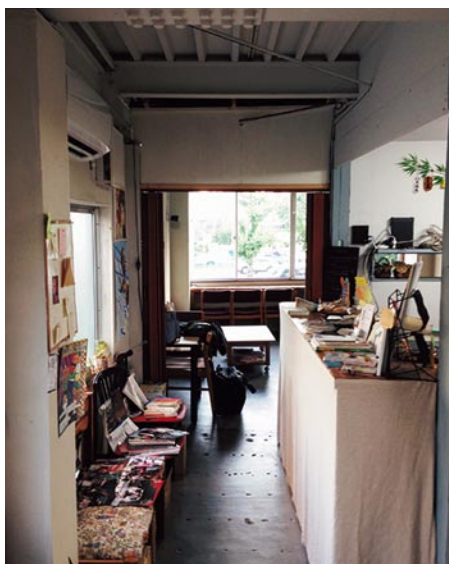
前衛演劇や舞踏などのアンダーグラウンド史に名を残すこの小劇場は、二階に楽屋兼宿泊可能な畳部屋を持っている。“アーティスト・イン・レジデンス”と呼ばれる、滞在型の制作兼発表もできるスペースが日本で知られるようになったのは、1990年代のことである。しかし『セツ寺共同スタジオ』は、そのような言葉が一般化していなかった1970年代から、滞在しながら作品を作り込むことを可能とする施設(と言っても畳部屋だが)を維持し、アングラをはじめとする様々な舞台芸術

のつくり手や観客を育ててきた。大須の魅力とは、電子パーツやアニメなどととも、『セツ寺共同スタジオ』のような場をひっそりともっているところではないか。

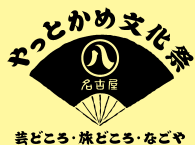
そのセツ寺のすぐ近く、西大須の交差点から大須通りを東へ行ったところに、『Theater Cafe』と書かれた小さな看板を見つけることができる。2012年の春にオープンしたこのカフェは、その名の通り、映画とアニメーションを上映するシアターでもある。名古屋のミニシアター「シネマスコレ」や映画祭に関わってきた江尻真奈美さんと、短編アニメーションの上映会を主催してきた林緑子さんの二人によって運営され、ユニークな映像作品を上映する場所となっている。カウンターの前に並べられた椅子には、雑多に様々な映画や美術関係のチラシが置かれている。萌え系アニメのチラシを背景に、映像関係の学会資料まであったりする。一般の映画館やテレビでは見ることができない短編映像を上映するという主旨を持ちながら、ある特定の傾向には閉じないようにする意識が、空間にゆるやかに漂っているように感じられ、心地よい。

そういえば、名古屋在住の美術家に岡川卓詩さんという方がいる。岡川さんは、近年、ネット上にある花の画像を集め様々なイメージに象ったコラージュ絵画を制作している。そのイメージの選択がまたおもしろい。ペラスケスの「マルガリータ」を思わせる西洋絵画を象ったものもあれば、「ウルトラマン」や「鉄腕アトム」、はたまた「初音ミク」を想起させるものまである。それらを見ると、「マルガリータ」のシルエットに対しても「ウルトラマン」のシルエットに対しても、同じように自身の記憶を重ねていることに気がつく。ハイカルチャーにもサブカルチャーにも、憧憬を持ちつつゆるやかにつながる。そこにはやはり、心地よさがあるのだ。

大須を歩きながら、そのようなことを考えていた。



Theater Cafe



# やっとかめ文化祭

～芸どころ・旅どころ・なごや～

25日間



狂言師：井上松次郎

## 古典の日 邦楽名古屋舞台

- ◆日時 11月1日(金) 17:30
- ◆会場 名古屋能楽堂
- ◆料金 指定席4,000円 ほか

## 四百年の時をつなぐ 十一世藤田六郎兵衛 笛の世界

- ◆日時 11月4日(月・休) 14:00
- ◆会場 名古屋能楽堂
- ◆料金 指定席4,000円 売売 自由席 一般3,500円 ほか

## 劇座公演 元禄なごや事件帖

～朝日文左衛門 元禄御豊奉行日記より～

- ◆日時 11月9日(土) ①14:00 ②18:00
- ◆会場 大須演芸場
- ◆料金 <全自由席>2,500円 残席僅か

## 受け継がれる大衆芸能

- ◆日時 11月12日(火) 18:00
- ◆会場 大須演芸場
- ◆料金 <全自由席>2,500円

## 和泉流狂言づくし ～名古屋は狂言のまちじゃ～

- ◆日時 11月15日(金) 18:30
- ◆会場 名古屋能楽堂
- ◆料金 指定席4,000円 ほか

## 御殿能 ～尾張名古屋は芸でもつ～

- ◆日時 11月16日(土) 14:00
- ◆会場 名古屋能楽堂
- ◆料金 指定席4,000円 ほか

日程：10月31日(木)～11月24日(日)

主催：やっとかめ文化祭実行委員会

<構成> 名古屋市(文化振興室・観光推進室・歴史まちづくり推進室)、公益財団法人名古屋市文化振興事業団、公益財団法人名古屋観光コンベンションビューロー、中日新聞社

問い合わせ：名古屋市文化振興事業団 TEL052-249-9387

※事業の詳細は <http://www.yattokame.jp> にてご確認ください。

### オープニングステージ

- ◆日時 10月31日(木) 18:30～20:30 ◆会場 オアシス21

### 芸どころ まちなか披露

辻狂言、平成殿様踊り、箏曲、長唄、正調名古屋甚句など、名古屋のあちこちで路上パフォーマンスが繰り広げられます。

- ◆日程 11月1日(金)～14日(木)、16日(土)～18日(月)、21日(木)、22日(金)
- ◆会場 市内各所

### まちなか寺子屋

専門家を講師に招いて、歴史や伝統文化についての勉強会を開催します(全16講座)。

- ◆日程 11月2日(土)、3日(日・祝)、9日(土)、10日(日)、16日(土)、17日(日)、23日(土・祝)
- ◆会場 市内各所 ◆料金 500円～2,000円

要予約

### 歴史まち歩き

東海道などをよく知るまちのボランティアがご案内します(全23コース46回)。

- ◆日程 11月1日(金)～24日(日) ◆会場 市内各所
- ◆定員 各回20名 ◆料金 500円

要予約

最高の瞬間を  
鮮明な映像と音で  
お届けします！  
感動をハイビジョン・4K映像で表現

# TVSnext

TVSnext 株式会社 ティーブイエスネクスト

〒460-0013 名古屋市中区上村津2丁目14番15号  
TEL 052-322-6541 FAX 052-322-6638  
http://www.tvs.co.jp



■ホール舞台音響設備 販売、設計、施工、保守

株式会社エーアンドブイ  
〒464-0846 名古屋市中区千種区城木町二丁目98  
TEL 052 (761) 5400  
FAX 052 (761) 0909

## 舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。  
ハイビジョンで撮影し  
ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 エーワン・ビデオ・システム  
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

# ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,300円で毎月お手元にお届けいたします。  
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ

〒464-0850 愛知県名古屋市千種区今池1-14-11 CASA LUZ302  
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

### 業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング ④舞台・イベントの運営